

新発見絵画「ブロンホフの家族たちとビールマン夫人」 のオランダ語書き入れについて

ルディ・トート

はじめに

「ブロンホフの家族たちとビールマン夫人」は、令和六年三月十八日付の長崎県の報道発表によると県が同年二月に購入し、三月十九日～四月二十一日の間に長崎歴史文化博物館で一般公開された作者不詳の群像肖像画（次頁の図一、材質・形状…絹本着色、額装サイズ…絵画部分五三・〇×六四・五cm 全体六九・五×八一・五cm）である。

ヤン・ロック・ブロンホフ (Jan COCK BLOMHOFF) アムステルダム、一七七九年～アメルスフォールト、一八五三年¹は二回にわたって出島オランダ商館に滞在し、一八〇九～一八一三年には荷倉役、一八一七～一八二三年には商館長を務めたが、一八一七年の再来日の際、男性の召使に加え、妻のティチア・ベルグスマ (Tijda BERGSMAN) レーワルデン、一七八六年～ハーグ、一八二二年²、幼い息子のヨハンネス (Johannes COCK BLOMHOFF) ハーグ、一八一六年～ユトレヒト、一九〇〇年³、乳母のペトロネラ・ムンス (Petronella MUNS) ハーグ、一七九四年～ハーグ、一八四二年⁴、女性の召使のマラティ (Maraty) 詳細不明⁵が同伴した。さらに、ブロンホフたちを乗せたヴラウウェ・アガータ号 (Vrouwe Agatha) の航海士 (stuurman) の一人、ヨハンネス・ビールマン (Johannes BIERMAN) アムステルダム、生年不明～海上、

一八二一年⁵も妻のヤコバ・ピーク (Jacoba PIEK) グローニンゲン、一七九七年～死没不明⁶を連れていた。女性の同伴は異例であったため、同船が八月十六日に入港すると混乱を引き起こしたが、長崎奉行は仮に上陸を許可した。しかし、ブロンホフが病気で妻による看護が必要であるという建て前での再三の嘆願も甲斐なく、幕府はオランダ船の帰航後の滞在を認めなかった。同年十二月四日に女性たちと幼児のヨハンネスの乗船が命じられ、六日にブロンホフが船上で家族に別れを告げた後、十日に船がバタヴィア（現ジャカルタ）への帰路についた⁷。

約三ヶ月半の滞在期間中、出島出入りの絵師がブロンホフ一家を描き、様々な絵画等が現存しているが、県の報道発表の通り、本画は特に注目に値する点が少なくとも三つある（「」は報道発表からの引用）。

① ベルグスマ（赤いドレスを着用）がスクエア・ピアノを弾くものは他にも確認されているが、「着色の上、精巧に描かれた作品として確認できるものは現在、本画のみ」である。

② ピーク（緑のドレスを着用）を描いたと「確実に特定できるものは本作のほかには確認されていない」。

③ 「本画の作成時期が渡来同時期の数年間に特定できる」。遅くとも一八二二年以前に描かれたと思われる、解釈によっては一八一七年八、九月ごろに描かれたと考えることもできるが、「他の家族図はここまでの特定ができない」。

①に関しては、竹内有一氏が紹介する白描画にも触れておかなければならない⁸。同じくスクエア・ピアノを弾くベルグスマを描く、

図一「ブロンホフの家族たちとビルマン夫人」



色指定をした線画であるが、ピアノの角度と形やベルグスマの服装、姿勢等がほぼ完全に一致し、両画の間に明らかに何らかの関係がある。しかし本稿では、②ピークの同定と③作成時期の特定の糸口となる本画左上のオランダ語の書き入れに着目したい。第一節で書き入れの内容を紹介し、描かれている人物を同定した後、第二節では書き入れの内容を手掛かりに作成時期の特定を試みる。

一、オランダ語書き入れの内容および肖像人物の同定

書き入れのオランダ語原文は次頁の図二、拙訳は左の通りである。

商館長ヤン・コック・ブロムホフの妻と息子、さらに息子の乳母と女中の氏名と年齢、一八一七年に上記商館長によってここ長崎へ連れて来られた――

妻	ティッタ・コック・ブロムホフ、旧姓ベルグスマ	三十一歳
息子	ヨハネス・コック・ブロムホフ	一歳五ヶ月
乳母	プレトロネラ・ムンツ	二十三歳
女中	ヤコーバ・ピーク	十九歳
女中	マラテイ	三十三歳

「以上は、」ディルク・ゴーゼマン「署名」

によって書かれた

まずは、ピークがビールマンの妻として乗船していたにもかかわらず「女中」として紹介されていることが目立つが、これは、ブロムホフの家族ではないピークの来日を正当化するために、長崎奉行

が建て前としてブロムホフの女中の一人として扱ったためである。⁹⁾

アムステルダム国立美術館 (Rijksmuseum) 所蔵のブロムホフ家旧蔵絵画等、一部の肖像人物の服装や表情が酷似する絵画も複数あるため、肖像人物の同定は容易である。ブロムホフ家旧蔵絵画は、肖像人物が部分的に本画と共通するが、ブロムホフ自身と一人の男性の使用人が加わっている一方、緑のドレスの女性だけが描かれていない。¹⁰⁾ ブロムホフが持ち帰った絵に自分の妻ではなく航海士の妻が描かれているとは考えにくいことから、両画に描かれている赤いドレスの女性がベルグスマ、本画にしか描かれていない緑のドレスの女性がピークであることが分かる。服装や肌髪色、姿勢等から、左端の女性がマラテイ、ヨハネスを抱えている女性がムンスであることも明らかである。これらのことは、同じくオランダ語で人名が書き込まれている他の絵との比較によりさらに裏付けられる。¹¹⁾

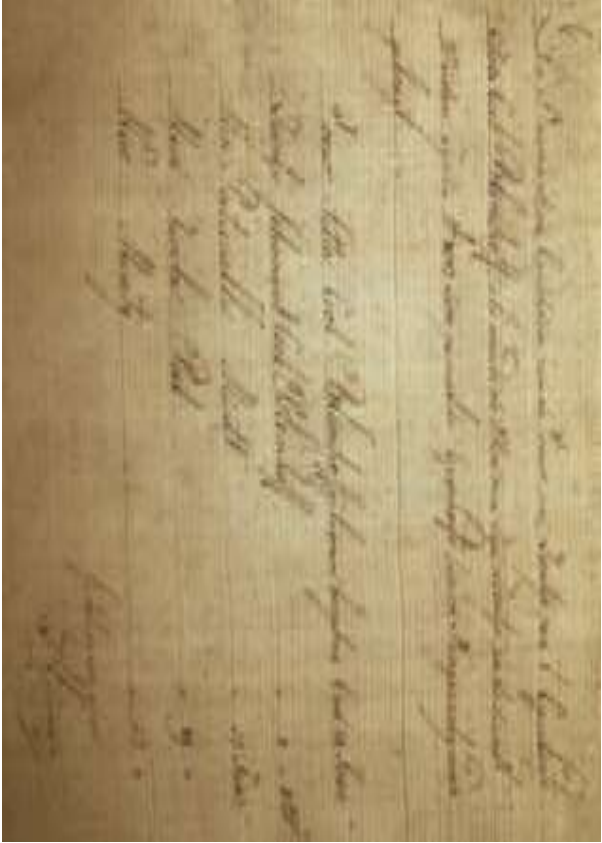
ピークが手に持っている書物についても一言を付しておかなければならない。次頁の図三の通り、一見して判読可能な洋文に見えるが、実物を近くから凝視しても単語が一つも特定できず、単に当時のオランダ語の筆記体に見せかけて描かれたものようである。

二、作成時期の特定

作成時期の特定には、書き入れの署名者が重要な手掛かりになる。

ディルク・ゴーゼマン (Dirk GOZEMAN) アムステルダム、一七八三年(海上、一八二六年)¹²⁾ は、一八〇八年のフェートン号事件で拉致され、船上へ連行されて人質にされた二人の商館員の一人として知られている。¹³⁾ 彼は一八〇二年に初めて来日し、オランダ商

図二 オランダ語書き入れ



De Naamen, en, Ouderdom van de Vrouw, en, Zoonjtje van 't Opperhoofd
Jan Cock Blomhoff, als meede de Min van Zyn Zoonjtje, en, de dienst
Meiden Zyn in A^o 1817 door gemelde Opperhoofd hier in Nangazacky meede
gebracht—

Vrouw Titta Cock Blomhoff, gebooren bergsma	Oud 31	Jaar
Zoonjtje Johannes Cock Blomhoff	" 1	" 5 M ^d
Min Prettonella Munts	" 23	Jaar
Meid Jacoba Piek	" 19	"
Meid Maraty	" 33	"
Geschreeven door		
D ^s Gozeman [署名]		

図三 ピークが手に持っている書物



図四 デイルク・ゴーゼマンの筆跡と署名
書き入れの筆跡（上）と署名（下）



商館文書におけるゴーゼマンの筆跡（上）と署名（下）



館で当初は助手 (adjuvant) を務め、一八〇六年に会計士 (boekhouder)¹⁵、一八〇九年には荷倉役に昇進した。¹⁶一八一八年には在職のまま一旦バタヴィアへ戻り、次の四年は毎年バタヴィアと長崎の間を往復して夏と秋のみ出島に滞在した。¹⁷一八二二年には病気を訴えて以後の日本への派遣の免除を願い出、十一月二十六日に最後に長崎港を後にした。¹⁸一八〇二～一八二二年の間は、一八〇六年と一八一〇年の二回、江戸参府にも同行しているが、一八一七年のブロムホフの家族の来日から自身の最後の離日までの間に行われた二回、すなわち一八一八年と一八二二年の参府には、参加していない。¹⁹

因みに、出島には同時期にカール・ヘンドリック・ゴゼマン (Carel Hendrik GOZEMAN) アムステルダム、一七九八年～バタヴィア、一八三〇年²⁰という人もおり、混同しやすいため、注意が必要である。彼はデイルクの異母弟で、一八二一～一八二六年の間、二等書記 (klerk der tweede klasse) としてオランダ商館に勤めた。²¹

書き入れの筆跡と署名をオランダ商館の史資料に見られるデイルク・ゴゼマンの筆跡と署名と比較すると、書き入れが後年の他者による筆写ではなく、ゴゼマンの自筆であることが明らかである。前頁の図四の右側は書き入れの本文の一部 (Jan Cock Blomhoff および Opperhoofd「首長」「商館長」) と署名で、左側はオランダ商館の史資料に見られるゴゼマンの筆跡 (Jan Cock Blomhoff の下に Opperhoofd van de Nederlandsche Handel alhier「長崎」におけるオランダの貿易の首長「商館長」) と署名の例である。²² 本画にブロムホフと男性の召使が描かれておらず、日本で珍しがられた女性と幼児しか描かれていないことや、書き入れでピークが

女中と呼ばれていること、商館員のゴゼマンがわざわざ署名していることなどから、ゴゼマンが本画の書き入れを絵師または日本人の所有者から依頼されて日本で書いたと思われる。ゴゼマンが一八一七年のブロムホフの家族の来日から一八二二年の自身の最後の離日までの間に江戸参府に同行していないことを考え合わせると、書き入れが一八一七～一八二二年の間に長崎で書かれたということになる。したがって、絵師のものも一八二二年以前のもので、絵師もしくは所有者が、長崎で、直接的であれ他者を介してであれ、商館員に接する機会のある人であったと結論づけてよからう。

書き入れに見られるヨハンネスの年月齢の解釈によつては、書き入れ、ひいては絵師のものが一八一七年八、九月ごろに描かれたと考えることもできる。ヨハンネスは一八一六年三月六日に生まれたため、「二歳五ヶ月」がゴゼマンが書き入れを記した時点の年月齢であるとすれば、ブロムホフたちが長崎に到着した一八一七年八月十六日から、ヨハンネスが一歳六ヶ月になった同年九月六日までの間に書かれたということになる。しかし、執筆時点ではなく来日時点の年月齢であるという解釈も可能であるため、確実ではない。

おわりに

冒頭で述べたように、精巧に描かれたスクエア・ピアノと、書き入れによつてピークの同定と作成時期の特定が可能であることが本画の特色である。書き入れに関しては、上でも触れたように、他にもオランダ語で人名が書き込まれている絵が存在し、年齢が含まれているものもあるが、書体や綴り方から判断すると、すべて日本人の手によるものと思われるため、商館員が直筆したものは恐らく本

画のみであるということも特記に値する。また、ゴージェマンは「Tita「ティチア」を「Tita「ティッタ」と、Petronella Muns「ペトロネラ・ムンス」をPetronella Munts「プレトロネラ・ムンツ」と書き間違えているが、他の絵の書き入れでも同様の誤記が散見される。さらに本画の早い作成時期を考慮すると、本画の書き入れが他のものの原型となった可能性がある。この点を含め、数あるブルムホフ家族図の中で本画の美術史的位置づけに関しては、今後の研究に期待したい。

(長崎大学多文化社会学部助教)

注

¹ Molhuysen, P.C. & Blok, P.J. (編) *Nieuw Nederlandsch Biografisch Woordenboek* 第一巻 (A.W. Sijthoff, Leiden: 1911) の項目 BLOMHOFF (Jan Cock) (W.C. Muller 筆)。

² *Digitaal Vrouwenlexicon van Nederland* の項目 BERGSM, Tita (https://resources.huysens.knaw.nl/vrouwenlexicon/lemnata/data/BERGSM) 1014年1月13日付)。

³ ハーグ文書館所蔵民事登録文書 (0335101) 目録番号10七第五四葉表、ユトレヒト文書館所蔵民事登録文書 (四八一) 目録番号四七六〇一第四二葉裏。

⁴ *Digitaal Vrouwenlexicon van Nederland* の項目 MUNS, Petronella (https://resources.huysens.knaw.nl/vrouwenlexicon/lemnata/data/Munts) 11014年1月13日付、M. Paape 筆)。

⁵ 非営利団体 *FamilySearch* のウェブサイトで閲覧できるケープタウンのオランダ改革派教会婚姻簿 (https://www.familysearch.org/ark:/61903/1:1:6KTV-HLCZ) によると、ビールマンはアムステルダム、妻ピークはグローニンゲン出身であったが、アムステルダム文書館所蔵民事登録文書 (5001) 中の十八世紀後半の洗礼簿にはビールマンの同姓同名者が複数見られるため、彼の生年は特定できなかった。ピークが *Bataavische Courant* (『バタヴィア新聞』) 一八二二年第二二号 (六月二日付) に掲載した死亡広告によると、ビールマンは同年四月七日、船上で海賊に襲われ殺害された。

⁶ グローニンゲン文書館所蔵洗礼簿 (一二四) 目録番号一五三第三二葉表。

7 経緯に関してはオランダ国立文書館所蔵在日オランダ商館文書（一・〇四・二一）目録番号二三〇、二三一の商館日記や目録番号六九一の各種資料が詳しい（以下「商館文書二三〇」等のように略記）。本稿で挙げる商館日記はすべて日蘭学会（編）『長崎オランダ商館日記二〇一十』（雄松堂出版、一九九〇～一九九九年）に和訳が収録されている。

8 竹内有一「文化14年のピアノ奏図―日蘭交流の舞台裏―」（『国立音楽大学研究紀要』第三六集、国立音楽大学紀要編集委員会、二〇〇二年、八一～九二頁）。ピアノのメーカーや、商館員の一人が長崎奉行の前でピアノを演奏するエピソードについても考察している。

9 商館文書二三〇の商館日記の一八一七年八月十七日の記述。

10 ブロムホフ家旧蔵絵画は <http://hdl.handle.net/10934/RM0001.COLLECT.328423> を閲覧しよう。

11 他の絵画との比較に関しては松井洋子・高島晶彦「東京大学所蔵の二つの「ブロムホフ家族図」」（『東京大学史料編纂所附属画像史料解析センター通信』第一〇〇号、東京大学史料編纂所、二〇一三年、一七～二九頁）を参照。

12 商館文書五二二中の商館員名簿、アムステルダム文書館所蔵民事登録文書（五〇〇一）目録番号一一二第五二八頁、*Opregte Haarlemse Courant*（『ハールレム誠実新聞』）一八二六年第一〇二号（八月二十六日付）中の死亡広告。

13 商館文書二五六の秘密日記や商館文書五三七、五八九の各種資料が詳しい。秘密日記の和訳は日蘭学会（編）『長崎オランダ商館日記四』（雄松堂出版、一九九二年）に収録されている。

14 商館文書五三一中の一八〇二年十月二十五日付商館評議会発蘭領東インド総督府（以下「総督府」）宛書簡、商館文書四二九中の一八〇三年六月十七日付総督府発商館評議会宛書簡。

15 商館文書五三四中の一八〇五年十一月十五日付商館評議会発総督府宛書簡、商館文書四三二中の一八〇六年六月六日付総督府発商館評議会宛書簡。一八〇五年の評議会からの上申を受け、翌年に総督府が任命した。

16 商館文書五四二中の一八一三年十一月十五日付商館評議会発総督府宛書簡、商館文書四三八中の一八一七年六月六日付総督府決議抜粋。一八一三年に当時の荷倉役ブロムホフがシャーロット号事件の一環としてバタヴィアへ赴いた際、評議会がゴーゼマンを臨時荷倉役に任命し、一八一七年に総督府が確定させた。

17 商館文書五四六中の一八一八年十二月六日付商館長発総督府宛書簡、商館文書六九三中の一八一九年十一月三十日付商館長発蘭領東インド総督（以下「総督」）宛書簡、商館文書六九四中の一八二〇年十二月六日付商館長発総督宛報告書、商館文書六九五中の一八二一年十一月五日付商館長発総督宛報告書。

18 商館文書六九六中の一八二二年十一月二十五日付商館長発総督宛報告書、商館文書二三六の商館日記の一八二二年十一月二十六日の記述。商館文書四四四中の一八二三年五月二十日付総督府決議抜粋によると、翌年に正式に退職が認められ、注12で挙げた死亡広告によると、一八二六年のオランダへの帰航中、船上で死去した。

19 商館文書二一九の商館日記の一八〇六年三月四日の記述、商館文書二二三の商館日記の一八一〇年二月十八日の記述、商館文書

二三一の商館日記の一八二八年二月十三日の記述、商館文書二三五の商館日記の一八二二年二月六日の記述。上述の通り、一八二二年の春はゴーゼマンが一時的にバタヴィアに戻っていた。

²⁰ アムステルダム文書館所蔵民事登録文書（五〇〇一）目録番号一一三第四七一頁、*Javusche Courant*（『ジャワ新聞』）一八三〇年第六一号（五月二十五日付）中の死亡広告。

²¹ 洗礼簿（注12と注20で挙げたアムステルダム民事登録文書）において兩人の父の名が一致するに加え、カーレル・ヘンドリックの両親の婚姻予告（アムステルダム文書館所蔵民事登録文書（五〇〇一）目録番号六三七第三九頁）に父の死別した前婦としてディルクの母親が記載されている。

²² 商館文書六九五中の一八二一年十一月五日付商館長発総督宛報告書、商館文書七〇〇中の一八二六年十二月二十日付商館長発総督宛報告書、商館文書一五〇七〜一五〇九中の給料勘定書。

²³ 図四の左側は商館文書一四三九による。

²⁴ 注3で挙げたハーグ民事登録文書による。

²⁵ 注11で挙げた松井・高島論文でいくつか例が紹介されている。

〔付記〕

この場を借りて、本稿の執筆にあたって多くの有益なご意見を賜った長崎県文化観光国際部文化振興・世界遺産課文化企画班の齋藤義朗氏、ならびに「ブロンホフの家族たちとビールマン夫人」の画像をご提供くださり、本稿への掲載をご承諾くださった長崎歴史文化博物館に深謝を表したい。